

〔河海抄〕光くすだまなど 續命縷 靈絲 綵索などいへり、いづれも藥玉の體也、○

略 御記曰、延喜十三年五月五日丙午、糸所供奉藥玉如常、玉替懸差御柱前例也、去年九日、茱萸以藥

延長三年五月五日丙申、書司立菖蒲瓶、糸所奉續命縷如常、五月五日、糸所藥玉を供ず、去年の
茱萸を撤して、御帳の東の柱に結付也、

〔枕草子〕^三せちは 五月に玄くはなし、略○中、そらのけしきのくもりわたりたるに、きさいのみや

などには、ぬひどのより御くすだまとて、いろくの糸をくみさげてまいらせたれば、みちやう

たてまつるも、やの柱の左右につけたり、九月九日の菊を、あやとす、しのきぬにつゝみてまゐ

らせたる、おなじはしらにゆひつけて、月比あるくすだまとりかへてすつめる、又くすだまは、菊

のをりまであるべきにやあらん、されどそれはみないとを引とりて、物ゆひなどして、玄ばしも

なし、略○中、つちありくわらははべの、ほどくにつけては、いみじきわざとつねにたもとを

まもり、人に見くらべ、えもいはずけうありと思ひたるを、そばへたること、ねりわらはなどに、ひ

きとられてなくもをかし、

〔古今要覽稿〕^{時令}くすだま藥玉 ぐす玉は、そのはじめ漢土よりおこりて、皇朝にも世事となれ

り、さてその造なせるさまは、ふるくは五綵の糸にて、菖蒲艾などを貫たるもの也、それを後には、

なでしこ、あぢさゐ、その外色々の時の花どもしてかざれるよし、新古今集の歌などにて、しかお

ぼえたり、これを後々は、絲花にてつくれり、すなはち今の世にも見所あるさまに造なしたるも

のあり、此國にては、嘉祥二年五月に、はじめ群臣に藥玉を給へるよし、みえたり、もろこしにて

もはやくよりのこと、見えて、風俗通などにもしるせり、さて漢土にて續命縷といひ、又長命縷

五色縷、あるひは、縷索、辟兵、繒などもいひ、さて五月五日に、是をひぢにかくる時は、あしきやまひ

をうけず、かつ壽命をのぶといへり、されば續命縷の名もあるなるべし、さて内裏には、此藥玉を